

## 第5節 まとめ

### 1 岩宿時代—押水町の岩宿時代の遺跡

はじめに

現在石川県では37の当該期の遺跡が発見されている。その分布は石川県全域に広がる（北陸旧石器文化研究会 1990）。押水町では本遺跡を含め6つの遺跡が確認されている。そのうち、4遺跡は押水バイパスに係る調査で見られ、3遺跡は報告がなされている（北野他 1987、米沢他 1987、三浦他 1988）。また、松山和彦は、その内容の詳細な検討を行い、石器製作の技術基盤を解明すると共に、全国的見地から石器群の系統や編年の位置を明らかにしている。（松山 1987）。今回は、押水バイパスに係る調査の最後の報告ということで、松山の研究結果に基づき、前述3遺跡の概要を再度紹介すると共に、本遺跡を含む残りの遺跡に付いても紹介し、押水町の岩宿時代を概観したい。

#### (1) 宿向山遺跡（第218図）

遺跡は標高約40mの海成段丘上に位置している。岩宿時代の石器は資料整理の段階で発見され、これまでに29点を確認している。遺物包含層は定かではないが、段丘堆積物の直上ぐらいから出土したものと思われる。調査区内ではグリッド別の出土状態から2つのブロックが存在したと考えられるが、平坦面の広がりからみて調査区外にもブロックの存在が想定できる。

北側のブロックでは台形様石器1（未報告）、くさび形石器1、局部磨製石斧1、石核1（未報告）、剥片を9を確認している。台形様石器は、佐藤分類（佐藤 1988）のⅠ-b-1類に当たるもので、器体下半を欠損している。また、石核と接合している。剥片を横に用い、打面部は打面を除去するような形で背面側から、ヒンジフラクチャーとなった剥片端部では腹面側から調整加工が施されている。打面側では急角度の、端部側では平坦な剥離となっている。台形様石器と接合した石核の素材は、打面転移を頻繁に繰り返し、横長、幅広剥片を生産する石核から剥離された分厚い剥片である。まず、素材の打面を除去し、台形様石器の素材となった剥片を含む2枚を腹面側で剥ぎ、その面を打面として背面側で剥片剥離を行っている。また、相対する辺でも小形の剥片を剥離している。石材はメノウである。

局部磨製石斧は撥形を呈し、刃部は緩く弧状に仕上げられている。石材は凝灰岩と思われる。

南側のブロックではナイフ形石器1、台形様石器2、小剥離痕を持つ剥片1、石核3、剥片6を確認した。ナイフ形石器は鉄石英の縦長剥片を素材としている。調整加工は後世の破損と区別しづらいのだが、基部周辺に施された微細な剥離痕がそれに当たると考えている。台形様石器の内一点は佐藤分類（佐藤 前掲）のⅡ類に当たるものである。加工はやや急斜なものが腹面に施されている。石材は珪化凝灰岩である。もう一点はⅢ類に当たるもので、先端を欠損している。小さな貝殻状剥片の端部に微細な加工が施されているものである。石材は玉髄である。

石核は3点出土している。剥片剥離作業が相当に進んでおり素材の形態はよくわからないが、分割礫や、分厚い剥片を素材としているようである。最終的に板状になったものと、三角錐状のものがある。どれも最終段階では小型の貝殻状剥片や横長の剥片を剥離している。板状の物は玉髄、三角錐状の物は鉄石英である。

この他、出土位置不明で石核、剥片がある。この石核は、分厚い剥片の打面側で、打面と作業面を入れ代えながら横長、幅広剥片を剥離している。削器、筥状石器として使用された可能性がある。

剥片の形状は両ブロックとも差がない。小型貝殻状のものもあるが、横長、幅広のものがめだつ。石刃としてよいものはないが、縦長剥片を連続的に剥離した痕跡の残る剥片がある。

石材は珪化凝灰岩、玉髄、メノウ、鉄石英が、両ブロックともに認められる。母岩は10個体以上が確認でき、両ブロックにまたがって分布するものも認められる。但し、凝灰岩は正確な分類を行っていない。また、その他の石材も点数が少ないのでやや細かい分類となっており統合される可能性がある。

剥片剥離技術は横長、幅広剥片を剥離するものが主体となる。石核は、分割礫等を素材として、サイコロを転

#### 第4章 免田一本松遺跡

がすように打面転移を行いながら、剥片剥離を行うものと、分厚い剥片等を素材としてその一側縁に作業部位を固定し、打面と作業面を入れ換えながら剥片剥離を行うものがある。ただ、一つの打面―作業面からは数枚の剥片を連続して剥離するようである。

遺物の遺存、出土状況とも悪く、また、他にブロックの存在が想定され、全体像は不明である。ただ、台形様石器の製作はこの地で行われているようである。

##### (2) 宿東山遺跡（第218図）

遺跡は谷頭に面した標高37m前後に緩斜面に位置する。同じく海岸段丘上である。1ブロックを確認している。残念なことにこのブロックは仮設建物建設の際に大部分が破壊され、石器の多くはこの地点の排土中より発見されたが、8点が調査区壁面よりプライマリーな状態で出土しており、調査区外にも分布を持つようである。また、火山灰分析がこの壁面で行われ、石器はA T降灰層準より下層からの出土であると確認された。

石器は、ナイフ形石器2点、台形様石器2点、小剥離痕を持つ剥片2点、石核1点、剥片11点、碎片13点を確認している。この他、この地点より北西に約90m離れた標高約33mの地点で小剥離痕を持つ石刃が単独出土している。石材はすべて珪化凝灰岩で、正確な母岩別分類は出来ないが、数種類の母岩が存在すると考えている。

ナイフ形石器は、石刃を素材とし基部に加工を施すものである。一点は先端が平らで、左側縁の加工は器体中央までおよぶ。もう一点は欠損して基部のみである。調整加工は基部周辺に限られる。何れも、左側縁の加工が右側縁のそれより顕著である。また、素材の形をほとんど変えていない。

台形様石器は佐藤による分類（佐藤 1988）のⅢ類に当たるものである。一つは小型貝殻状の剥片の先端に加工を施している。もう一つも同様であるが、加工は腹面側に、平らな先端を一部残しそれをはさむような形で施されている。

石核はやや幅広の縦長剥片を素材として、その両側縁腹面側で小型貝殻状の剥片を生産している。

剥片は、石刃、小型貝殻状剥片、幅広、横長剥片がある。

以上の資料から復元可能な剥片剥離技術は、石刃、縦長剥片剥離技術と横長、幅広剥片剥離技術である。石刃、縦長剥片剥離技術は、石刃技法と呼べるような、石刃を連続的に剥離するもので、その石核は分割礫等を素材とし、打面は両設のものが想定できる。また、頭部調整は施すものの、打面調整は行なわれない。

横長、幅広剥片剥離技術は、剥片を素材とし、その腹面で小型貝殻状の剥片を連続的に剥離するものと、頻繁に打面転移を行いながら同様な剥片を剥離するものが想定できる。ややおおぶりの横長、幅広剥片を剥離する技術については資料数が少なくよくわからない。

母岩別分類をしっかりと行い得ないのと、ブロックが破壊され発見され、また、全掘していないのではっきりとは言えないが、ナイフ形石器は搬入品あり、このブロックでは台形様石器の製作が行われたのではと考えている。

##### (3) 竹生野遺跡（第217図）

遺跡は末森山から派生する丘陵状に位置し、標高32～38mを計る。やはり海岸段丘上である。当該期の石器の発見は、調査中に堅穴住居跡から石刃が出土したことによる。60点を確認しているが、そのほとんどが切り合い関係にある3棟の堅穴住居跡から出土しており、また、その他のものも遺構出土で、包含層遺物として取り上げられたものは5点にすぎない。よってブロック等は全く不明である。確認のトレンチ調査ではベースの段丘堆積物を掘り下げているが、石器は出土していないと言う。調査地は、後世の耕作等で著しく攪乱されており、遺構に落ち込んだもののみが発見されたということであろうか。

石器は定形的なものが少ない。台形様石器は佐藤（佐藤 前掲）の分類ではⅢ類であるが、形態的にはⅡ類に類似する。素材は小型の縦長剥片で、背面にはポジ面を持つ。加工は先端部左に微細なものが施されている。石材は鉄石英である。この他、小剥離痕のある剥片中にも台形様石器である可能性の高いものがあるが、本例も含み二次加工のしっかりしたものはない。

鋸歯縁状石器は基部に欠損している。やや厚みのある石刃状の剥片を素材として、右側縁では腹面側に、左側

縁では背面側にやや大きめの加工と微細な加工を組み合わせ鋸歯縁を作り出している。右側縁には一部未加工の部分を残している。先端部には腹面に二つの槌状剥離様の剥離痕が残されており彫器とも考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

錐（未報告）は小形の不定形な剥片を用いている。素材剥片の打面部は欠損している。剥片の左側縁部に機能部を作り出している。石材は鉄石英である。

石核は3点出土している。一つは幅広の縦長剥片を素材とし、その腹面で小型貝殻状の剥片を剥離している物で、最終形態がサイコロ状をなすもので、自然面を一枚残すものと板状となった物がある。これらには同一母岩と思われる剥片がある。

剥片は、石刃、横長、幅広剥片、小型貝殻状剥片がある。石刃は2点あるが、何れも両設打面の石核から剥離されたものである。頭部調整がなされている。石材は珪化凝灰岩である。

剥片剥離技術は、前述の2遺跡で見たものとはほぼ同じである。剥片どうしの接合資料がある。打面転移が行われていること、一組の打面―作業面では数枚の剥片が剥離されていることが理解できる。

使用されている石材は、珪化凝灰岩、メノウ、玉髄、鉄石英、蛋白石、チャート、黒曜石である。母岩別分類では20個体を確認したが、宿向山遺跡と同様な理由で確かなものではない。珪化凝灰岩は、石刃、横長、幅広剥片に用いられ、その他の石材は、横長幅広剥片、小型貝殻状剥片に用いられている。

#### (4) 免田一本松遺跡

前述した通りである。1点の石刃から導き出されることには限りがあるが、藤原の言う（藤原 1983）真性の石刃技法の完成された時期の所産と考えてはば間違いでないであろう。

#### (5) 御館遺跡（第217図）

遺跡は標高約20mの扇状地に位置する。石川県で初めて岩宿時代の石器が確認された遺跡で、石器は1960年に水田耕地整理の作業中、地下約60cmの所から須恵器の破片などと共に出土したとされている。当時、石川考古学研究会副会長であった秋田喜一氏は、これを「先土器時代の所産となし一種のナイフブレード」と考え、1961年の日本考古学協会大会で、芹沢長介、江坂輝弥、戸沢充則らの鑑定を受け、1964年『古代学研究』37（秋田 1964）で紹介している。

石器は現在行方不明である。写真、実測図から判断すると、最大幅が打面直下にある打瘤の発達した石刃で、単剥離打面をもつ。頭部調整は顕著で、背面に残る二面の剥離面は、腹面と同一方向からの打撃によるものと思われる。左側縁打面よりに残る小剥離痕は細かいもののやや急角度に見え、調整剥離痕であるならばナイフ形石器と考えられる。群馬県後田遺跡（麻生 1987）や千葉県東林跡遺跡（須藤 1986）出土の一側縁加工のナイフ形石器に類似したものがある。長さ9cm、幅3cm、厚さ1.5cm。石材は頁岩に類似した物とされている。

#### (6) 正友はちじがり遺跡（第217図）

前述の秋田論文（秋田 前掲）と押水町史（松永、村井 1973）に紹介されている遺跡である。押水町史には石槍と紹介されている。水田耕地整理中に、地下30cmの粘土層中より多数の土器破片と共に発見されたい。秋田によれば、御館出土の石器と同様にあめ色を呈すらしく、頁岩の可能性もある。形態的には岩宿時代に属する可能性もあり、資料を実見したのちの検討が必要である。

さて、これまで押水町で確認された当該器の遺跡の概要について述べてきた。遺跡は、丘陵上に位置するものと、扇状地に立地するものとが認められる。丘陵上に位置するものは何れも小さな谷を望むように地点に立地している。また、扇状地に立地するものは丘陵先端の裾に当たる位置に立地している。標高は50mを越えることはない。遺跡の規模は、石器出土様態が悪いため正確なところはわからないものの、何れも小規模なものと考えられる。このようなあり方は、当概期この地域（押水バイパスルート周辺と言えようか）の土地利用を示唆するものかも知れない。

それぞれの遺跡の石器群は、その石器組成や、保持する剥片剥離技術等から三つに分類が可能であろう。ただ、免田一本松遺跡や正友はちじがり遺跡は石器一点のみであり、各々別群と思われるものの内容については不明と

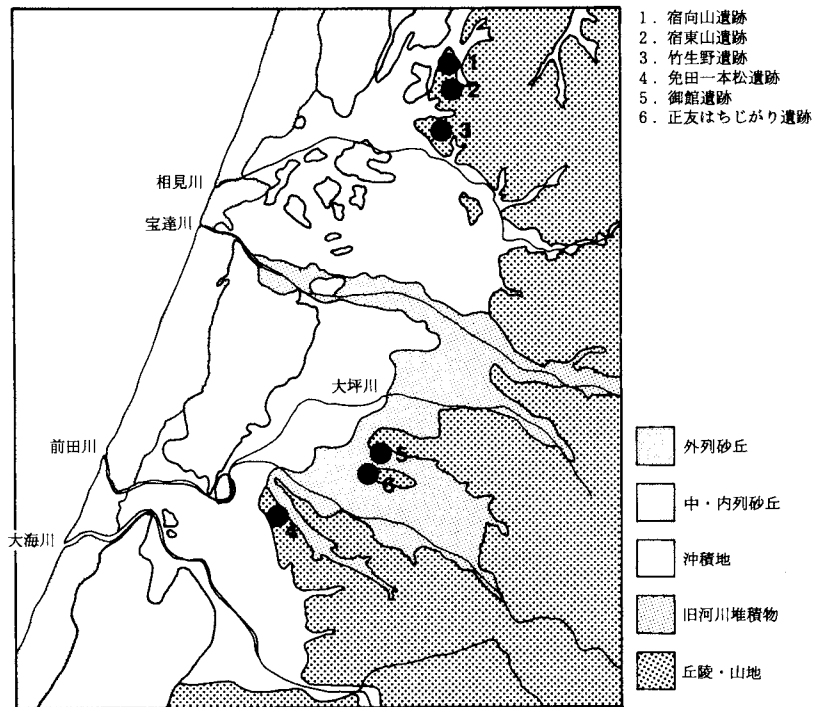
第4章 免田一本松遺跡

言わざるを得ない。残りの一群は、宿向岡遺跡、宿東山遺跡、竹生述遺跡、御館遺跡で、その出土状態に問題があるものの、御館遺跡を除いては石器点数がある程度まとまっておりその内容に一步踏み込むことが可能である。これらについてはすでに松山の論考（松山 前掲）がある。これまで発表されたものは実測図の誤りや内容の訂正などが必要な部分があり、今回は時間的に余裕がなく未報告のものとあわせてあらためて述べる機会を持ちたいと思っている。編年的には竹生野遺跡（関東立川ロームⅩ層並行期）→宿向山遺跡（同Ⅹ層並行期）→宿東山遺跡（同Ⅶ層下部並行期）という位置づけを考えている。

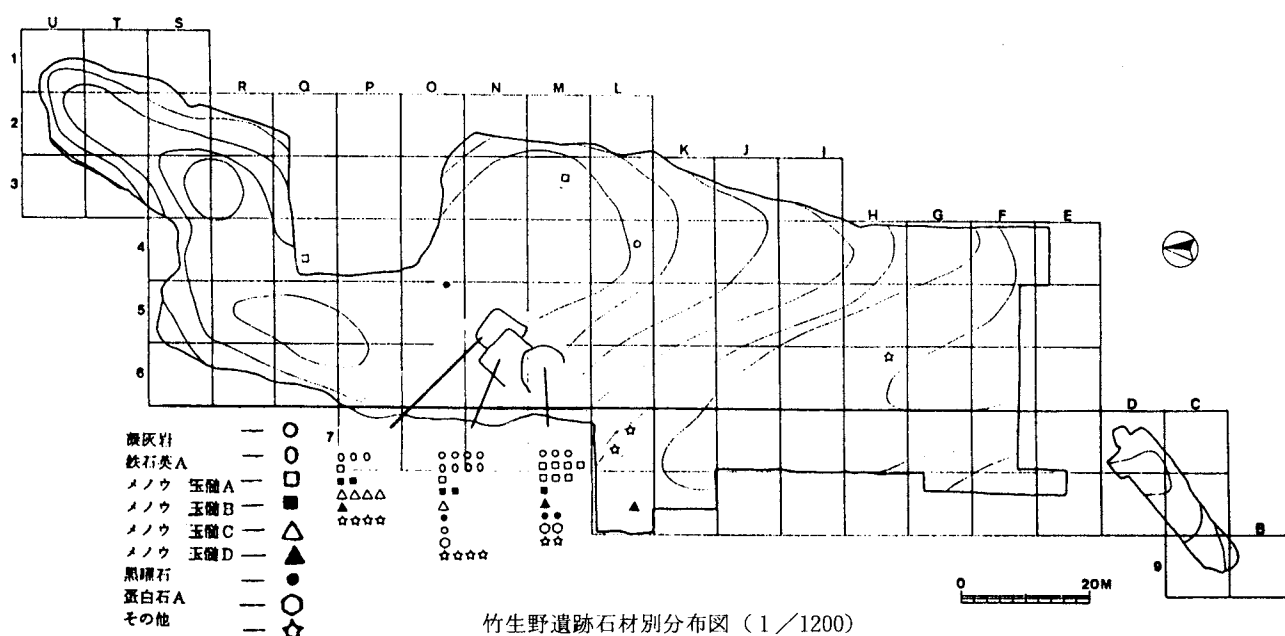
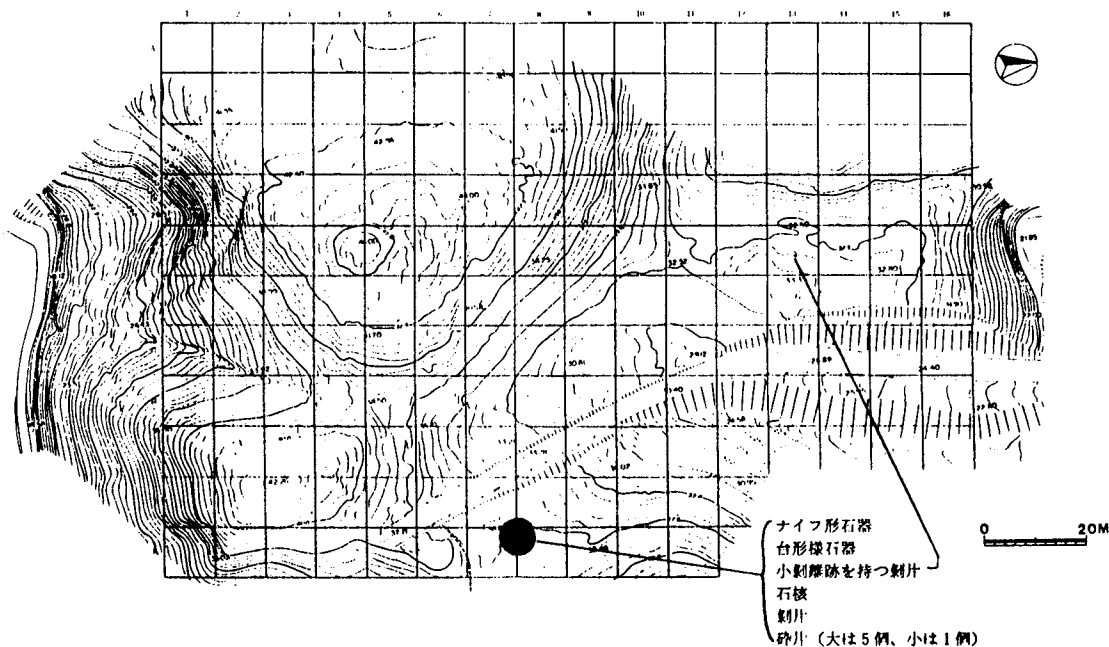
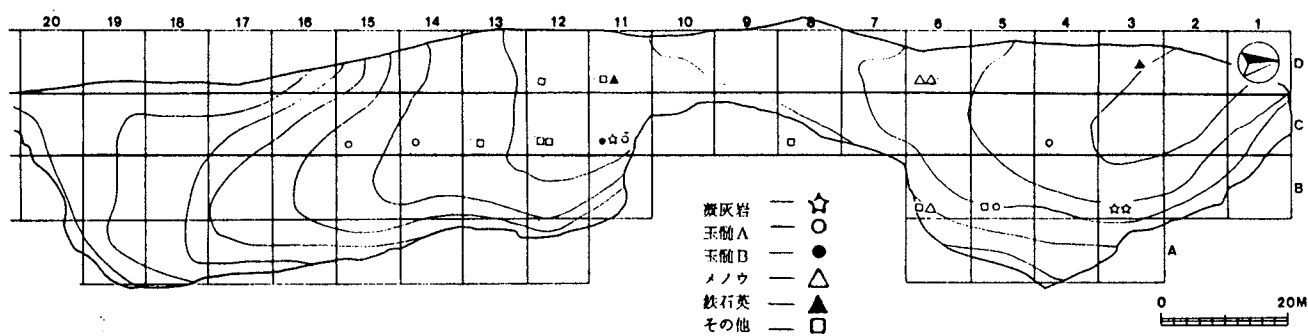
このように押水町には五つの当該期の遺跡があり、県内でもその発見例の多い地域である。今後の遺跡数の増加と研究の発展がこの地域でなされることを望みたい。

引用・参考文献

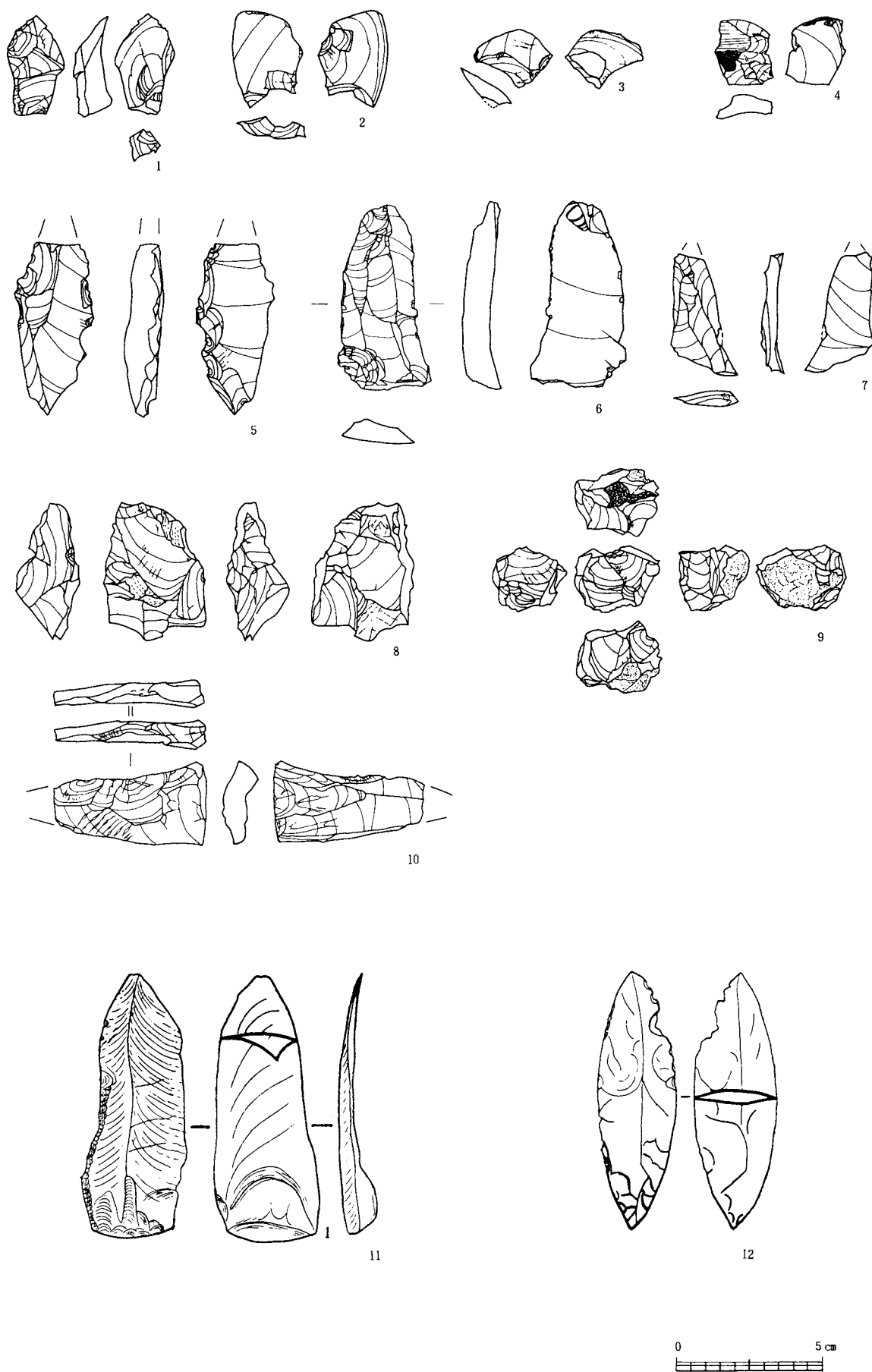
秋田喜一 1964 「石川県羽咋郡押水町出土石器の一例」『古代学研究』37 古代学研究会  
麻生敏隆他 1987 『後田遺跡（旧石器編）』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
北野博司他 1987 『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73巻第3号 日本考古学会  
須藤隆司 1986 「群馬県藪塚遺跡の石器文化―ナイフ形石器の型式学的研究―」『明治大学考古学博物館報』2 明治大学考古学博物館  
藤原妃敏 1983 「東北地方における後期旧石器時代の技術基盤―石刃石器群を中心として―」『考古学論叢』1  
松永 清・村井 一郎 1974 「原始古代 第2章 原始より古代へ」『押水町史』 押水町役場  
松山和彦 1988 「第6章 考察 第1節 旧石器時代の末森山麓」『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
三浦純夫他 1988 『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
米沢義光他 1987 『宿向山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター



第215図 押水町の地質と岩宿時代の遺跡  
(北野他1987を改変)



第216図 宿向山、宿東山、竹生野遺跡石器分布図



第217図 竹生野遺跡（1～10）、御館遺跡（11）、正友はちじがり遺跡（12）出土遺物、（1～4は台形様石器、5は鋸歯縁石器、6、7は石刃、8～10は石核、11はナイフ形石器、12は尖頭器）



第218図 宿向山遺跡（1～7）、宿東山遺跡（8～15）出土遺物（1、8、9はナイフ形石器、3、10、11は台形様式石器、4は局部磨製石斧、12、13、15は微細剝離痕のある剥片、5～7、14は石核）